

研究タイトル：

## 中世における鷹書の研究



氏名：	大坪 舞 / OTSUBO Mai	E-mail：	m-otsubo@sasebo.ac.jp
職名：	准教授	学位：	博士(文学)
所属学会・協会：	日本文学協会、和歌文学会、藝能史研究会、説話文学会、立命館大学 日本文学会		
キーワード：			
技術相談 提供可能技術：			

### 研究内容： 中世における鷹書の研究

鷹を訓練して狩をする鷹狩は、狩猟という性格上軍事力の象徴とみなされ武家に愛好された。ことさら江戸幕府において家康・家光・吉宗などが鷹狩を盛んに行ったことはよく知られる。しかし、本来鷹狩りは仁徳天皇の時代に大陸から伝来して以来、天皇をはじめとする公家の優美で洗練された文化であった。平安後期以降、天皇が自ら鷹狩を行うことはまれになった。それでも、和歌・連歌・絵画において鷹狩は欠かせない素材であり、古典として仰がれる『伊勢物語』や『源氏物語』に描かれたこともあいまって、楽、装束など公家の他の学芸と深くかかわる「鷹道」としてあり続けた。

鷹道としての意識が高まったのは、諸学芸が確立した室町期であった。鷹道の伝授が行われ鷹狩りに関する述作である「鷹書」が盛んに記された。群書類従二十五部のうち「鷹部」としておかれるほど、鷹書は一大領域を築いていた。

鷹書の知識は、鷹狩りを行う者のためのみにあったわけではない。和歌・連歌学書や、辞書、庭訓往来注などの講釈の書においては、まとまった形で鷹書の知を取り込まれており、これらの文学の実相を明らかにするためにも鷹書の研究は必須である。

これを明らかにするため以下の二点から研究を行っている。

- (1) 室町期の鷹書を中心として、書誌学的調査を行い、資料的特性を明らかにする
- (2) 鷹書のみならず和歌・連歌や故実書との比較も行い、鷹書の言説を位置付ける内容検討

#### 【主要論文】

- 大坪舞「近衛前久『鷹百首』『みゆきせし』類伝本考」『古典遺産』第 65 号、pp31-48、2016 年 3 月
- 大坪舞「室町後期における西園寺家の鷹書編纂—立命館大学図書館西園寺文庫蔵「鷹詞書」考—」『日本文学』第 64 巻第 12 号、pp13-24、2015 年 12 月
- 大坪舞「鷹百首「たかやまに」類伝本考」『古代中世文学論考』第 29 集、新典社、pp284-318、2014 年 4 月
- 大坪舞「戦国期における鷹の伝授—公家における芸道伝授の観点から—」『藝能史研究』第 201 号、pp1-14、2013 年 4 月
- 大坪舞「持明院基春における鷹書編纂—『責鷹似鳩拙抄』と持明院家旧蔵書の比較を通して」『立命館文学』第 630 号、pp141-150、2013 年 3 月
- 大坪舞「鷹書説話と和歌・講釈—近衛前久『龍山公鷹百首』を中心として」『説話文学研究』第 47 号、pp185-197、2012 年 7 月
- 大坪舞「鷹書における恋と女の秘伝—『女郎花物語』を端緒として」『アジア遊学 もう一つの古典知』第 155 号、勉誠出版、pp76-89、2012 年 7 月

#### 提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	